

2002.12.1

「澤井河川塾」近畿通信 Vol. 26  
(NPO 法人近畿水の塾ホームページ)

////////////////////////////////////  
**12/18(水)河川塾は石川ミニワークショップです！**  
////////////////////////////////////

**【河川塾NEWS】**

去る12月1日、大阪府主催の「私の水辺大発表会」第2次発表会がドーンセンターにて開催され、府内の河川やため池、水路、学校ビオトープなどの身近な水辺で活動されている様々な団体から「私の水辺」での取り組みについて発表がありました。

一般の部に「寝屋川再生ワークショップ」、「アクアフレンズ」、「石川河川公園『自然ゾーン』ワークショップ」、「摂南大学エコシビル部」、中高校生の部に「貝塚高校環境科学部」、小学生の部に「堺市立土師小学校 6年生」、「堺市立安井小学校」、「近木っ子探検隊モクズガニ班」等々、河川塾でもおなじみの団体さんとともに「NPO 法人近畿水の塾」も参加してきました！

各賞の受賞結果は下欄のとおりですが、一般の部 最優秀賞「寝屋川再生ワークショップ」は、やはりさすが！ですね。

今年は川の日ワークショップのグランプリと併せて2冠達成おめでとうございます！！



河川清掃や源流域の間伐などとともに、まちづくりを視野に入れた活動を、寸劇でアピールする「寝屋川再生ワークショップ」のメンバー（一般の部 本選）



『私の水辺』を『私たちの水辺』に！とアピールし、流域間の連携と情報交換を呼びかけた「NPO 法人 近畿水の塾」のメンバー（一般の部 予選）

## 【各賞受賞結果】

### 一般の部

- ・最優秀賞 寝屋川再生ワークショップ（ねや川水辺クラブ）
- ・優秀賞 田尻町まちづくり住民会議
- ・敢闘賞 狭山副池自然づくりの会
- ・敢闘賞 せんなん里海公園うみべの森を育てる会

### 中高校生の部

- ・最優秀賞 大阪府立貝塚高校環境科学
- ・優秀賞 大東市立四条中学校生徒会科学部

### 小学生の部

- ・最優秀賞 岸和田市立新条小学校
- ・優秀賞 近木っ子探検隊モクスガニ班
- ・敢闘賞 堺市立土師小学校
- ・敢闘賞 阪南市立箱作小学校

（その他予選敗退団体にもそれぞれ特別賞を授与）



「近畿水の塾」勢揃いして発表



特別賞受賞

私たち近畿水の塾は、「『私の水辺』を『私たちの水辺』に発展させていきましょう！」のメッセージをもって、様々な活動と人々の情報交換・連携をアピールし、特別賞『近畿の川を学びま賞』をいただきました。

今後は、近畿水の塾の独自事業として「近畿の川 よい川／わるい川大賞」等のイベント開催により人と人、流域内外の幅広い交流を呼びかけて行きたいと思っております。

（来年度の「私の水辺大発表会」を大阪府さんから受託するのもあり、かな？）

各賞受賞結果と一部写真は大阪府河川室の速報フラッシュより転載いたしました。

## 【前回河川塾の内容】

「第23回澤井河川塾」 澤井河川塾開講2周年です！！

日時：11月20日(水) 19:00～

場所：センター（いつもの6F会議室）

出席：澤井、古川、白木茂、白木江、西河、寺川、水谷、白樫、小川、富田、  
佐藤拓、佐藤侑（計12名）

内容：マイリバー紹介「近木川」

白木茂さん

## 近木川

概要 流長 14km（葛城山～二色浜）

流域 30km<sup>2</sup>

特徴 流域の全てが貝塚市域に入っている

下流は堤防だが近木川の大半は掘り込み河道

下流では蛇行が直線化されている

河口には沢山の生き物が生息している

貝塚市 概要 人口 約8万5千人

市域 44km<sup>2</sup>

観光 紀州街道・貝塚御坊・和泉もめん・ユニチカ貝塚・和泉櫛

近木川における活動

クリーンアップ・蟹つり・水鳥観察・トンボ採り・蛍鑑賞会

紅葉狩り・源流探検他

全国2級河川ワースト10での経歴

‘92 4位

‘93 1位

‘94 6位

‘95 4位

‘96 圏外

‘97 1位

## 流域内 BOD の変化

きびたに川・近木川合流点	.....	低い
市街地	.....	極端に上がる
↓	.....	減少
近木川大橋	.....	極端に上がる (BOD 最大 45)

## 近木川の生物

**蟹** ハクセンシオマネキ

ヤマトオサガニ

オサガニ

ハマガニ

クロベンケイ

**鳥** 20種(冬調査)

アオサギ

ササゴイ

ヒドリガモ

セグロセキレイ 他

**草** (塩が入る為種類は少ない)

ヨシ

セキウキヤガラ

**貝・魚(河口)**

カキ

フジツボ

ボラ 他

## 近木川の問題点

これだけ生き物が多いのに、生き物に触れるのが難しい

要因

フェンス・危険な段差、深み・水辺へ降りる手段が無い

親・小学校の教師による反対

現状では

自然遊学館が臨時でフェンスを開け簡易階段を降ろす

これからの要望

河口の水質改善 → 河口を広くし干潟を造る

自然保全と再生 → 干潟をフラッシュや人(少し)の手で

生き物とふれあい → 生息環境・アクセス・安全性を充実

## わんどを造ろう これまでの経緯

1997.12	君塚さんの提案から始まる
1998.06	汽水わんどをつくる会発足
1998.10	大阪府の関係課と検討会(第1回)
2001.01	府からの案、つくる会に提示
2002.01	府に状況説明
2002.09	府と検討会

## 近木川河口にわんどを作る案

概要	計画地	近木川右岸(旧近木川の蛇行部分に当たる)
	計画	3000m <sup>2</sup> (川に接する面100m×奥行き50m)の敷地を抉り取り、周りを頑丈な護岸(堤防)で囲みその後は自然の砂の堆砂により、わんどを造る。
	管理	公園課と河川課で50:50?
	コンセプト(希望)	生き物が生き生きと生息している場 川は川に作ってもらう 人は少しだけ手伝う(ゴミ拾い等) 地域の人を巻き込めるようなものに 有望な遊びの空間 10年でわんど内に深みと陸地を造りたい

## 自然による期待

造って欲しいもの	理由	その為に必要なもの
干潟	泥や砂を好む貝・蟹の為	水の流れ・潮の干満・フラッシュ
淵	魚の為	硬い護岸・強い流れ
ヨシ原	鳥・蟹の為	フラッシュ・掃除
真水の水路	生物の多様性・遊び	井戸水

問題点 大阪府案では護岸の形態が安全第一で護岸は流れを消すような構造(流れによる深みが作れない)。

花や道など人工的な整備(計画の目的の抽象性)。

府は治水面から淵を作る要因となる硬い護岸を作りたくない。

経済面からもあまり掘り込んだ構造物は作りたくない。

コンクリートを用いた整備(川の自由度を下げる)。

情報が地域民まで届いていない。改案の話し合う機会が未定（きいてくれなさそう）

造ったわんどを降りられるようにするかどうかは、市民の間でも二分されている。

#### 澤井河川塾内、意見交換での状況

「行政としては20～30年前は、安定河道（造ったものは変わって欲しくない）という考え方があったが、今も根付いているのではないのでしょうか？」

「10年後を予測した構造物を造ればそれは問題ないといならないでしょうか。」

「物理的な形は真似られても、自然のバランスは予測不可能です。」

「初期の形を決めておけばそれでいいのでは？」

「何が起こるかわからないのだからわんど自体は自然に任せればよい。」

「ある程度のハブニングも予想したものを最初の形に含めればよい。」

「どこまでを人がし、どこからを自然に任せるのかその線引きしだいである。」

「府としては、自分たちで作って管理したいという意思があり、あまり川に任せる案は首を縦に振れないのだろう。」

「自然・生物を前面に出されても、専門外という感があるのだと思う。」

「近畿川の塾でできるのはこの分野でのサポートではないのか？」

「ただし1団（団）体の意見であり、市民の反映ではない所でどれだけの力を持つことになるのか。」

「公園側としては河川課に任せたいところだろう。」

「河川として公園を造らずもともと人を排除しておけば（わんどを）もっと造りやすかったのだと思います。」

「河川専門家は、自然の地形を手本にして予測するので、類似形の無い近木川は予測し難い。」

「蛇行でわんどの（予想の）変わりにならないのか？」

「難しいと思う。条件が折り合う所が無いのは不安である。」

「わんどを造るときに多少の部分を市民参加にすれば、失敗のときの説明や作業人員の確保などの負担が軽減される。」

「確かに計画・施工の締めで色々な案が出る。が、その時に行政だけで進めているとしんどくなる。そういう意味での市民へのウエイトをもっと重くして欲しい。」

「初めから長期の計画をしておけば（計画を起こす上で）楽なのは？」

「行政の方では途中で手を加えることはしにくいので、市民責任にして近畿水の塾で間もちという関係が結構よいかもしれない。とりあえず、行政の方ではメンテナンスフリーにしたいのだろう。」

「自然に任せたわんど作りなら、失敗の定義とは何？」

「多少の予測を作っておいてその範囲外なら・・・と、言うことでしょう。」

「護岸を固めるなら、予想のしようも在るのでは？」

「行政も折れるところは、折れて欲しいですね。」

「行政において失敗は厳罰だから難しいでしょう。その意味から言っても生物系は専門家がいないので話（計画）に出したくないのだと思います。」

「そのあたりは、市民のほうから指示を出していくという形にすればいけるかも？」

「物理的な変化の測定はできても、生物的なことはどうやって測定するかの指標が無いし、また会計検査のしかたはどうするのか？」

「私有地ならば色々手を加えられるのに。」

「水理実験は果たして行政と民との妥協点になり得るか？」

「それも問題は生物的なことの予測が困難というところですね。」

「ただし、実験でも砂の状態や、形状、集まる粒子の割合等、物理条件を整えればどんな生物が住み着くかの予測はできるのでは。」

「行政がわんどの護岸を波の力を弱めるように造ったのは、安全面、経済面的なことだろう。」

「行政が中々自由に動かないのは、市民からの愚痴の予測とかもあるのかも。」

「コンセプトや方針をきっちり決めて、科学的根拠に基づく十分な説明をあらかじめ持っておけば大丈夫なのではないでしょうか。また、自己責任ラインを明確にしておくのも一つの手ですね。」

「しかし、花粉や（害）虫問題等はどう説明するか難しいと思います。」

「植物や虫を子供たちの教育や遊びに取り入れたら文句は出なくなるだろう。」

「市民の人がどこまで認知してくれるかですね。そこに自然遊学館の意義がある。別に市民議会とかにはノータッチでとにかく虫採り等のイベント等を用いて、自然との親しみ方を市民の間で根ざしていきたい。」

「行政のほうもゆっくりやってたら予算が出ないので焦ってますよね。」

「また、行政は予算面も含めて一過性で済ませたいのでしょう。ですから、自然に任せて10年間長い目で見るとこちら側の計画は嫌なんでしょう。」

「とって、市民のほうも（河川工事は）スケールが大きすぎて自分たちの手でどうこうといった実感が無いと思います。」

「細かい交渉は取あえず置いておいて、何でもいから造ってもらうべきでは？」

「河川工学として生物シュミレーションはどうですか？新しい改革ですよ（笑）」

「行政的には建前上でもシュミレーションしたという口実が欲しいと思います。」

「いかに行政を安心させるか？ですね。」

「頼り所を何処にするかですね。」

## 根本的な水質改善の方法について

- 「遊学館としては、クリーンアップぐらい。それ以上は他団体の企画です。」
- 「水源があるので上流からの下水をカットしても大丈夫。とすることをを利用して改善できるのでは？」
- 「昔は、ゴミを川に捨てるという、言わばゴミ捨ての文化と言うものが在りましたよね。」
- 「はい、ただ現代ではゴミ自体の材質が変化していることと、人口密度の増加の為そんな事をしたら大変なことになりますけどね。」
- 「中流域にも川に関心をもった人って沢山いるんですかね？」
- 「川の分校を造るという案もあつたりしたんですが、皆の考えがてんでんバラバラで、今は考えているような人は居ないかもしれない。」
- 「ただ、だからと言って遊学館なり水の塾なりが他の地域へでしゃばるのは越権行為だと思う、その地域からニーズが出ない限りはこちらからは動けません。」

## 近畿水の塾はどう在るべきか

- 「地域と地域を結ぶ相談所、情報商社みたいなものでしょうか。」
- 「困った時のタイアップ相手として、例えば模型実験を大学にまわすとか、実験条件の話し合いとか。」
- 「ただ、こちら側からその地域の動向を見続けるのは無理だと思うので、刻々変わる問題をどう捉えて対処するべきかが問題だ。」
- 「それに今のメンバーで実際に動けるのは、何人いるか・・・」
- 「問題点の整理的なことを扱うのが良いのかもしれないね。」
- 「あまり込み入ったことは無理かもしれないなら、一般的な事で良いので情報をオープンに開放する、例えば行政のほうとの話の進め方とか・・・と言うのでどうでしょうか。」

「そろそろ時間もおしてきましたので・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

[富田忠明]



## 【次回の予告】

次回、「澤井河川塾」のご案内です。

### 第24回「澤井河川塾」

日時：12月18日(水) 19:00～21:00  
・・・毎月第3水曜日開催です！！

場所：センター（いつもの6F会議室）

内容：特別シリーズ 流域間交流会  
「大阪府 石川と近木川」 - 寺川さん・白木さん  
(H14.12 石川、H15.01 近木川についてのワークショップ)

!!! 川における市民と行政の協働とは? ・ ・ ミニワークショップ開催 !!!

? 河川(公園)での自然保全と利用はどうあるべきか、その中で市民は何ができるのか、行政の悩みは何か、これからの協働には何が必要なのか、そんな課題についてざっくばらんに話し合う場にしたいと思いますので、関心のある方はどうぞご参加ください。

? H15.1.19 開催予定の「石川流域フォーラム」では、これらの取組みを受けて市民と行政の協働のあり方についての「市民アピール」を宣言します。

(近畿水の塾は、H15.1.19「石川流域フォーラム」を後援します)

## 【川の情報ボックス】

イベント報告(速報版)

「プロジェクト WET」講習会

日程：平成14年11月28日(木) 13:15~16:30

場所：交野市 星の里いわふね

主催：子どもの水辺サポートセンター

「プロジェクト WET」は 2000「川に学ぶ」シンポの第 3 分科会でも取り上げられた水に関する体験型環境教育プログラムの一つです。

今回、米国から講師を招き、大阪・東京で開催された本講習会について、簡単ですがご紹介します。

講習会には水の塾から足立さん、井上さん、佐藤侑、佐藤拓の 4 名が参加しました。最初に「WET」の簡単な概要説明の後、屋外でのアクティビティ紹介がありました。邦題は『水の旅』

そう、川シンポで山本幹彦さんが環境学習体験教室の中で実践していただいたものです。

「今朝あなたが飲んだ水は、明日はどこにいるでしょう？」

このテーマを頭に入れながら『水の移動過程』『水循環の中での水の様々状態』を認識し、表現することを目標にアクティビティは進められます。

アクティビティの内容は、参加者が二人 1 組で一つの水分子となって、用意されたサイコロの目の出方で水の様々な地点と状態へと移動していき、これらの“旅”の記録から水循環の物語を作るというものです。

このような学習の中で、単なる水循環の体験のみならず循環過程での汚染や浄化についてのプロセスを盛り込むことによって、自らの行動が環境に及ぼす影響についても気づいていくことが可能とのこと。

屋外活動での活発さもあり、ひじょうに“楽しめる”アクティビティでした。

その他、身近な食物における水分率から、水が生命体の欠くべからぬ構成要素である気づきを導くものや、川の周囲の都市計画からトータルの汚染の軽減には、流域内での連携が必要であることを学ぶといったアクティビティ等をご紹介いただきました。

また、アクティビティ後の質疑では、「プロジェクト WET」の日本導入にあたって、子どもの水辺サポートセンターと Watercourse-ProjectWET との協議が進行中との情報もありました。

現在、「WET」のファシリテーター資格の取得には本国での 6 時間講習と実地演習が必要とのことですが、近い将来「プロジェクト WET」が、林野系の「プロジェクト ラーニングツリー」、公園系の「プロジェクト WILD」とともに日本での米国移植型の環境教育プログラムの 3 本の柱となることでしょう。(プロジェクト アドベンチャーというものもありましたっけ?)

これから、近畿水の塾にも環境学習事業部みたいなものができたら、おもしろいかもしれませぬ。

(「プロジェクト WET」に関する情報<http://www.in.gov/dnr/soilcons/wet>)

[拓]

## イベント報告

「石川の竹で遊ぼう！」～竹を切ってみよう！竹でいろいろ作ってみよう！～  
に参加してきました！！

11月16日（土）に、富田林市の石川で開催されましたこのイベント、なんと定員30名のところをはるかにオーバーしての100名近くも集まるほどの人気イベントなのでした！

「近畿水の塾」として何とか無理をお願いしてメンバーに入れてもらい、軍手にノコギリ、頭にハチマキの重装備で竹林の間伐作業に参加してきました。

集合場所の広瀬児童遊園には既にたくさんの子どもたちが集まっていて、賑やかな雰囲気ですスタート！！

まず最初に、石川河川公園「自然ゾーン」ワークショップの寺川さんから、のこぎりを実際に使ったの間伐作業の説明がありました。

「現在は、無秩序な盗伐により細い竹ばかりが無数にあるので、1m四方に1本太い竹を残すぐらいの感じで細い竹は伐採してください。他には中途半端に膝ぐらいの高さで切り落とした竹があって、これは竹やりが生えているみたいなもので非常に危ない。どちらも同じように地面と平行にすり切る感じで切ります。ケガをしないように十分気をつけて作業してくださいね」との話を、子どもたちが真剣に聞いている姿は微笑ましくもまた、頼もしいなあという感じでした。



今回のイベントは、間伐により弱々しく荒れ果てた竹林を本来あるべき姿に復元し、ついでに伐採した竹で竹細工も体験してみようというのが目的とのこと。

竹と聞いたからには、どれだけ切りにくく硬いのかと想像していたのですが、ここの竹は『甘竹』という種類で、名前どおりスイスイと切りやすくてホッとしました。

が、しかし！

たとえ一本一本は切りやすくて、無数に生えている竹にはそんな“甘い”思いは通用しませんでした。

切っても切っても全然追いつかず、どこまで切っても周りはまだまだ竹だらけ…

かぐや姫の気分とはこんなものでしょうか？

川のそばで寒いだろうと着込んでいた上着を脱いでも、額に汗しながらの作業でした。工作タイムに切り替わってからは、今まで必死に竹を伐採していた子どもたちが我も我もと竹林の中から飛び出してきて、熱心に竹トンボや竹笛づくりを教わったり、できたての竹の弓矢でさっそく遊びまわっていて、とても微笑ましかったです。いつの間にか、大人たちも夢中で昔懐かしい竹細工に取りかかっていた。



このようなイベントを通じて子どもたちが、石川の自然に興味を持つようになることで、自分たちの住むマイリバーを実感していければいいなと思いました。

いつの日かの竹林の姿とあの子どもたちの成長が楽しみです。

[ 侑 ]

### 【事務局より】

今号から、前回お知らせしました「澤井河川塾」新世話人の方々から自己紹介をいただきます。トップバッターは企画運営担当、古川さんです。

今年四月に久しぶりでふるさとの大阪に戻ってきました古川です。昨年、「川に学ぶ」の全国大会を開催した岡山でたくさんの近畿水の塾の方とお会いさせていただきましたので、澤井河川塾にも比較的簡単に溶け込ませていただきました。

分かりやすい説明ができる河川技術者になりたいと常に考えていますが、なかなかうまくいきません。

河川塾でいろいろ経験を積んでいきたいと思えます。

皆さん、よろしくお願ひします。

古川さんには10月に早速、フィールドワーク「大阪川めぐり」を企画していただきました。これからも「川」に関する色々な情報をいただけることと楽しみにしております。